

2011 年日本の反原発ソングに関する研究

－ 1960 年代ベトナムの反戦歌との比較から －

吉 井 美知子

Study on Anti-Nuclear Songs of Japan in 2011

－ Compared with Anti-War Songs of Vietnam in 1960s －

YOSHII Michiko

〈Abstract〉

Artistic expressions have always been a communication tool of one's protest, and among those, creating and singing songs can be considered as one of the important elements. Thus in actual Japan, in the growing civil movement of anti-nuclear power plant that emerged after the severe accidents of 2011 in Fukushima, the artists stand up in creating and singing their anti-nuclear opinion.

The present study will take one example among these songs: “Zutto uso datta” (“Been telling a lie all the time”), a parody of the same author's famous song: “Zutto suki datta” (Been loving you all the time), created and sung by a Japanese rock singer, Kazuyoshi Saito (1966-).

Analysis of this Japanese song will be based on those made of the 1960s anti-war songs of Vietnam as an object of comparison. In the existing literature, Yoshii analyzed Trinh Cong Son's creation, a famous Vietnamese musician in 1960s, it attempted to universal success in describing everyday scenes in wartime Vietnam and letting a civil shout his/her feeling (Yoshii, 2004).

Though it is only a parody and not a new creation, the success of Saito's 2011 creation can also be explained by its characteristic of “letting a civil to shout his/her feeling”.

キーワード：プロテストソング、反原発、反戦、ベトナム、斉藤和義

はじめに

芸術とは「一定の材料・技術・様式を駆使して、美的価値を創造・表現しようとする人間の活動およびその所産」(広辞苑)と定義され、その表現方法には「造形芸術(彫刻、絵画、建築など)、表情芸術(舞踊、演劇など)、音響芸術(音楽)、言語芸術(詩、小説、戯曲など)」(前掲書)などさまざまな種類がある。これらの芸術作品を通して作者が反体制的な抗議や主張、すなわち「プロテスト」の意思を表現しようとすることがある。たとえばピカソの「ゲルニカ」という絵画作品は反戦の意思を表現したものとして有名である。

本研究では音響芸術と言語芸術の組み合わせである「歌」を通した「プロテスト」の表

現、すなわち「プロテストソング」と呼ばれる作品群を研究対象として取り上げる。2011年現在の日本において、いま最もタイムリーなプロテストソングは同年3月の福島第一原発の事故を契機とした反原発・脱原発運動のなかで歌われている歌の数々である。このなかから最もヒットした曲の1つを選び、どのような技法によりこの歌が市民の共感を得ているかを分析する。分析の枠組みとしては1960年代ベトナムの反戦歌についての先行研究を取り上げ、比較の対象とする。比較対象を1960年代ベトナムの反戦歌に定めることにより、①国および文化の違い（日本対ベトナム）、②時代の違い（2011年対1960年代）、③テーマの違い（反原発対反戦）の三点で大きく異なるプロテストソングについて、それらの差異を超えた共通点を発見することを目指す。

I 先行研究の検討

1. プロテストソング

辞書によるプロテストソングの定義は「反体制的な主張や抗議を歌詞に取り入れた歌」（小学館デジタル大辞泉）となっている。また百科事典では「社会の中の不公平や不正を告発し抗議する歌」と書かれ、「一般にアメリカのフォーク・ソングの分野に関し使われる。」（平凡社世界大百科事典）とされている。

どちらの定義に従っても、プロテストソングは社会運動に組み込まれている場合が多い。特に日本では1960年代にアメリカで社会変革を目指して歌われたボブ・ディラン（Bob Dylan）やピーター・ポール・アンド・マリー（Peter, Paul & Mary）等々による一群の歌を指してプロテストソングの起源としている論考が多いが、「反体制的な主張や抗議を歌詞に取り入れた歌」というだけの定義であれば、1960年代以前の世界のさまざまな場所ですでにプロテストソングは存在したと考えられる。

本研究では「社会変革を目指す歌」というプロテストソングの定義を採用する。何を变えたいかということテーマ別に分類すると、本研究で比較分析する反原発、反戦のほか、反核兵器、反基地、反公害、反人種差別、反性差別等々、さまざまな「反・・・」が存在することがわかる。変わる前の状況を単語で表し、その状況をなくすことを目指すという意味で「反」を頭に置くことで分類ができる。

2. ベトナムの反戦歌

1960年代後半のベトナム共和国（南ベトナム）では、日ましに激しさを増すベトナム戦争（ベトナム名は「抗米救国戦争」）のなか、市民による反戦運動が高まりを見せていた。この運動のなかで最もよく歌われ、かつ後世にも歌い継がれ、また日本をはじめとする海外でもヒットしたのがチンコンソン（Trinh Cong Son, 1939—2001）の作詞作曲した反戦

歌の数々である。

先行研究より引用する。

1960 年代中頃よりベトナム戦争が激しさを増してきて、彼（引用者注：チンコンソン）は反戦歌を書くようになる。現存する作品が全部で 196 曲あるうちの 69 曲が反戦歌である。彼の最高傑作はその前の時代の恋愛歌であるから、チンコンソンは反戦歌専門の音楽家ということはない。しかし 1960 年代後半の数年間、主として反戦歌だけを発表し、ギター 1 本を抱えてカンリー（引用者注：Khanh Ly, ベトナムの代表的女性歌手）を伴い、サイゴン市内の反戦コンサートで歌っていた。（・・・）チンコンソンは生まれてこのかた、第 2 次世界大戦、インドシナ戦争、ベトナム戦争とずっと戦争状態の祖国を体験してきた。そして戦争は彼の人生であったと同時に、創作のインスピレーションの源泉となった。（吉井 2004：125-126）。

チンコンソンの反戦歌は単に反戦コンサートだけで歌われたのではない。それはサイゴンの一般市民、田舎の農民、前線兵士たち、それも交戦中の両陣営の兵士たちが聴いていた。何より最もその歌を禁止すべき立場の大統領グエン・ヴァン・チュー（Nguyen Van Thieu）本人がチンコンソンの大ファンであった。果ては米兵にもファンがいて、2011 年現在もベトナムで英語バージョンのチンコンソンの反戦歌を歌い続けるアメリカ人歌手がいる。

チンコンソンの反戦歌は、先行研究において文化・空間を超えた普遍性、そして政治・時間を超えた普遍性の両者を兼ね備えた作品であったと結論づけられている。この普遍性もたらされた理由を歌そのものの技法から分析し、それを 2011 年日本のプロテストソングにも当てはめてみるのが本研究のねらいである。

3. チンコンソンの反戦歌における三分類

先行研究では、チンコンソンの反戦歌をその創作技法により三分類している。①戦時下の日常描写、②民衆の叫び、③平和と祖国統一への呼びかけ、の三分類である。

「戦時下の日常描写」の分類では、音楽家は戦争のなかで毎日を暮らす民衆の生活シーンを何のコメントもなしに淡々と描いている。まるで黙って映像だけを撮るカメラマンのようである。遠くで大砲の炸裂する音が聞こえるたびに、ちょっと手を止めて耳をすますサイゴンの公園掃除人を描いた「大砲があやす夜」（Đại bác ru đêm）、黄色い花が咲き乱れる春の野原で地雷を踏んで両足のない死体になってしまった小学生の男の子を描いた「ある春の朝」（Một buổi sáng mùa xuân）などの作品がある。

「民衆の叫び」では、音楽家は民衆のなかのひとりを取り出して、その人物に思いのたけを叫ばせている。あたかもジャーナリストがインタビューの相手にマイクを渡して叫ば

せているかのような歌である。あるいは音楽家が民衆のスポークスマンとなって、彼らに代わってその思いを発信しているともいえる。音楽家のコメントは一切語られない。代表作としては、気の狂った女という設定で恋人や夫、親友を戦場で失ったあらゆる女性に代わり「私の恋人はプレイメーで死んだ、D ゾーンで死んだ、ドンソアイで死んだ」と戦場の地名を羅列している歌「狂った女の恋歌」(Tình ca của người mất trí)、昔赤ん坊のときに子守唄を歌って寝かしつけた息子が 20 歳で戦死し、その死体をふたたび寝かしつけるために母親が歌う子守唄「お眠り坊や」(Ngủ đi con) 等がある。

「平和と祖国統一への呼びかけ」の分類になる歌は、1968 年のテト攻勢後に発表された。この時期以降のチンコンソンの反戦歌はすべてこの分類である。ここで初めて音楽家は自身の姿を現し、さあ戦争をやめよう、祖国は 1 つになろう、と自ら民衆に対して呼びかける。音楽家はこれまでのカメラマンやインタビュアーの役割を捨て、自身が預言者となって民衆を先導している。この分類には海外や後世に残った傑作は少なく、例外的に「大団円」(Nổi vòng tay lớn) という作品がいまも唯一、現社会主義政権下のベトナムで人々に歌われ続けている。

以上の三分類のうち、文化・空間を超えて日本でもヒット、あるいは政治・時間を超えて後世にまで歌い継がれてきたのは、①の戦時下の日常描写と②の民衆の叫びであった。なかでも②に分類される「お眠り坊や」は日本に輸入され、「坊や大きくならないで」という題名で高石友也らが日本語で歌い、深夜ラジオ放送で大ヒットを飛ばしている。

Ⅱ 2011 年日本の反原発ソング

1. 概観

2011 年 3 月の福島第一原発事故を受け、2011 年の日本では脱原発運動が盛んに繰り広げられている。そして運動に呼応する形でアーティストが数々の反原発ソングを創作、発表し、実際のデモ行進、集会、イベント等で歌われている。2011 年の事故以前に創作された作品が再び歌われるようになったケース、事故以後に新たにオリジナル曲として創作されたケース、以前のプロテストソングではないヒットソングを替え歌にしたもの、以前の反戦プロテストソングを替え歌にしたもの等、その創作のスタイルはさまざまである。発表の形式としては、商業ベースに乗った CD として発売されるケースはほぼ皆無であり、YouTube 等のインターネット上で発表されて普及するケースや、脱原発デモや集会の現場のライブのみで歌われるケースがほとんどである。そのため一体全部で何曲の反原発ソングが 2011 年に発表されたかというような統計は取ることが難しい。表 1 に作品の一部を示す。

表 1 2011 年日本の反原発ソング（筆者作成）

曲 名	原曲（替え歌の場合）	発表年	歌 手	作 詞	作 曲
サマータイム・ブルース	Summertime Blues	1988	RC サクセション	忌野清志郎	E.Cochran
ラヴ・ミー・テンダー	Love me tender	1988	RC サクセション	忌野清志郎	V.Matson
ずっとウソだった	ずっと好きだった	2011	斉藤和義	斉藤和義	斉藤和義
東電に入ろう	自衛隊に入ろう Andorra	2011	倒電魔炉バンド	不詳	M.Reynolds
プルトニウムの場合	フランシーヌの場合	2011	不詳	不詳	郷 五郎
原子炉のサンバ	てんとう虫のサンバ	2011	不詳	不詳	馬飼野俊一
原子力発電所そんなにいいなら東京湾で！音頭！	（オリジナル）	2011	奈良大介	奈良大介	奈良大介

表 1 にはマスコミやインターネット上での言及が多い主要作品 7 点を選んで掲載した。ここで特徴として挙げられるのはまず、替え歌の多さである。実際には楽曲から創作してプロテストソングに仕上げていったアーティストも多いと思われるが、最も有名で多く歌われていると考えられるのは大部分がすでに有名だった歌の歌詞だけをつくり替えた作品である。すでに楽曲が耳馴れているので、あとから歌詞を替えた曲を覚えてもらえやすく、歌いやすく、流行りやすいという利点があるのかもしれない。

たとえば 2011 年 11 月 6 日、神戸で開催された脱原発デモでは、百姓シンガー内田ボブによるオリジナル曲「さよなら、原発」が演奏され、参加者も一緒に歌うように促されたが、有名とはいえないオリジナル楽曲のことですぐに歌うのは難しく、大合唱にはならなかった。替え歌はどれも過去の有名なヒットソングからメロディーを取っているため大衆にとっては親しみやすい。

これらの 7 曲のうち 2011 年発表の 5 曲はすべてインターネット上の YouTube サイトを介して発表されている。商業資本と結びついて自らを売り出す必要があるアーティストにとって、CD の形でプロテストソングを発売することは非常に困難であり、インターネットサイトでの発表は大衆にアピールするための格好の場であるといえる。歌とともに映像が見られるため、匿名の歌手が映っていることもある。それをまた別の投稿者が歌と原発事故の写真と組み合わせて投稿し、新たな視聴覚作品として発表するなど、ネットのなかでひとつの芸術交流活動が行われているような状況である。

2. 斉藤和義「ずっと好きだった」

斉藤和義（1966- ）は日本のシンガーソングライター、ロックシンガーである。1993 年

にアーティストとしてデビュー、以来 TV 番組への提供曲や CM 曲で成功を収め、ライブや TV 出演で活躍している。

2010 年 4 月資生堂の化粧品 CM にオリジナル曲「ずっと好きだった」を提供、発売したシングル CD が売り上げ第 8 位を占めるヒットとなった。以下にこの CM ソングの歌詞を引用する。

ずっと好きだった 作詞・作曲・編曲 斉藤和義

この町を歩けば 蘇る 16 才
教科書の落書きは ギターの絵とキミの顔
俺たちのマドンナ イタズラで困らせた
懐かしいその声 くすぐったい青い春

ずっと好きだったんだぜ 相変わらず綺麗だな
ホント好きだったんだぜ ついに言い出せなかったけど
ずっと好きだったんだぜ キミは今も綺麗だ
ホント好きだったんだぜ 気づいてたろうこの気持ち

話足りない気持ちは もう止められない
今夜みんな帰ったら もう一杯どう？ 二人だけで

この町を離れて しあわせは見つけたかい
「教えてよ やっぱいいや」 あの日のキスの意味

ずっと好きだったんだぜ まるであの日みたいだ
ホント好きだったんだぜ もう夢ばかり見てないけど
ずっと好きだったんだぜ キミは今も綺麗だ
ホント好きだったんだぜ 帰したくないこの気持ち

ずっと好きだったんだぜ 相変わらず綺麗だな
ホント好きだったんだぜ

ずっと好きだったんだぜ
ホント好きだったんだぜ

〔JASRAC 出 1201381-201〕

軽快なロックのリズムに乗った恋愛の歌である。故郷の町に久々に帰った「俺」が、高校の同窓会でのことであろうか、「ずっと好きだった」彼女に再会するストーリーで、資生堂の 40 代女性をターゲットにした「IN & ON」ブランドの化粧品、そして CM に登場する 40 代の「相変わらず綺麗な」女性タレントたちと、まさに適合する歌であったといえる。

リフレーンの「ずっと好きだったんだぜ…」のくだりは、特に斉藤和義ファンでも J ポップファンでもない一般の日本人の耳にもよく入ってきており、何かの集まりで CD を流してみると「ああこの歌なら聞いたことがある」という反響が多いことが特筆できる。

3. 「ずっとウソだった」

2011 年 4 月 1 日より、斉藤和義は東日本大震災へのチャリティーライブ「斉藤和義 on UPSTREAM『空に星が綺麗』」を 5 週続けて敢行した。その同時期の 4 月 7 日、YouTube に自身の歌う「ずっと好きだった」の替え歌「ずっとウソだった」を発表する。サイト上では匿名となっているが、アコースティックギターで弾き語りする姿からは、本人であることが一目でわかる。発表と同時にインターネットサイト上では大騒ぎになり、多くの人々が引用、福島原発事故関連の写真を歌に載せて投稿したり、歌詞を英訳して国際的に発信するなど、大きな反響が見られた。以下にその歌詞を引用する。

ずっとウソだった

この国を歩けば 原発が 54 基
教科書も CM も 言ってたよ「安全です」
俺たちをだまして 言い訳は「想定外」
懐かしいあの空 くすぐったい黒い雨

ずっとウソだったんだぜ やっぱばれてしまったな
ホント ウソだったんだぜ 原子力は安全です
ずっとウソだったんだぜ ほうれん草食いてえな
ホント ウソだったんだぜ 気づいてたろう この事態

風に舞う放射能はもう止められない
何人が被曝すれば気がついてくれるの？この国の政府

この町を離れて うまい水見つけたかい
「教えてよ やっぱいいや」 もうどこにも逃げ場はない

ずっとクソだったんだぜ 東電も北電も
中電も九電も もう夢ばかり見てないけど
ずっとクソだったんだぜ それでも続ける気だ
ホント クソだったんだぜ 何かがしたいこの気持ち

ずっとウソだったんだぜ
ホント クソだったんだぜ

それまでチャリティーコンサート活動はしていたが、プロテストソングなど創ったことがなかった斉藤のこの歌は人々に衝撃を与えた。原曲の「ずっと好きだった」がヒットしてわずか 1 年がたったばかりで、同じ作者が替え歌を発表したことも注目を集めた。YouTube 上では匿名で発表しているが、その後、福島で開いたチャリティーコンサートでは本人がライブでこの替え歌を披露している。

栃木県出身の斉藤にとって、福島は遠い場所ではなかったかもしれない。また 2010 年 6 月に生まれた長男の子育て中であったことも彼をこの創作に駆り立てたのかもしれない。原曲を商業資本のために創作し、その 1 年後に商業資本を敵に回すような正反対の歌詞を作ったアーティストの豹変ぶりは人々に強い感銘を与えたと考えられる。

Ⅲ 比較分析

本章では、2011 年日本の反原発ソング「ずっとウソだった」を、1960 年代ベトナムの反戦歌の分析の枠組みで比較してみる。

「ずっとウソだった」をチンコンソンの反戦歌三分類に当てはめるとき、その分類は「②民衆の叫び」に該当する。斉藤は民衆のスポークスマンとなって、その思いを歌にして代弁している。「安全だ」と学校で習ってきた原発、ひとたび事故が起こると「想定外」の言い訳、出荷停止になったほうれん草、スーパーの棚から消えたミネラルウォーター等々、すべて 2011 年を日本で生きてきた民衆が経験し、疑問に思い、怒った、その思いのたけ

が代弁されて叫ばれている。そのしくみは、1960 年代後半のベトナムで夫や恋人を戦死させたすべての女性が「狂った女の恋歌」に共感するのとまったく同じである。

チンコンソンは「②民衆の叫び」の分類の歌では、自身を登場させず、ひたすら代弁者にとどまっている。歌のなかのどこにも「さあ、もうこんな戦争はやめよう。平和をとりもどそう。」という直接の呼びかけは出てこない。これが「③平和と祖国統一への呼びかけ」の分類の作品と大きく異なる点であり、さらにこれらの民衆の叫びの歌が国境を超え、また時間を超えて成功を収めた秘密であると考えられる。この点が、「ずっとウソだった」のなかで、作者が決して「原発を止めよう」と直接に呼びかけてはいないことと一致している。戦死した 20 歳の息子を前にして母親が、「なぜ 20 歳で眠ってしまうの？」と子守唄で呼びかけるとき、間接的に表現される反戦の思いがより味わい深く我々に伝わり共感を呼ぶ。それは「ほうれん草食いてえな」という庶民の素朴な願いを表現することから、ほうれん草が食べられなくなった状況へ反発する思いがより味わい深く伝わり、共感を呼ぶのと同じメカニズムである。

さらに「ほうれん草食いてえな」の一節は、2011 年 9 月の福島でのライブでは「牛肉食いてえな」と替えられていた。替え歌の歌詞がさらに替えられたのである。ほうれん草の出荷停止騒ぎが一旦落ち着いた後に、汚染稲わらを食べた肉牛の出荷停止騒ぎがあったことに合わせたもので、これもいちはやく民衆の思いを代弁したアーティストのアドリブであったと解釈できる。

斉藤とチンコンソンの大きな違いは、替え歌とオリジナル作品との違いである。作品の芸術性からは、斉藤はチンコンソンにはかなわない。チンコンソンの反戦歌はそれぞれが一個の芸術作品として完結しているのに対し、斉藤の「ずっとウソだった」は彼自身の「ずっと好きだった」に付随する替え歌である。そのため別のアーティストからはこんな歌は聴きたくないという旨の批判メッセージもネット上に寄せられ、論議を醸している。

しかしこの論議には意味がない。プロテストソングに芸術性を求めるか、それともより多くの人々の共感を呼ぶことを求めるか、その目的の違いによるからである。チンコンソンが注目されるのは、芸術的にも価値があるとされる優れたオリジナルのプロテストソングを書き、しかも同時に多くの人々の共感も得たからである。斉藤が注目されるのは、自身がヒットさせたオリジナルの歌を取り上げ、その芸術性を損なうことを覚悟で破壊し、そして民衆を代弁する歌詞を載せて発表し直したことにある。確かに替え歌であるからには、不自然な箇所が多い。なぜ黒い雨がくすぐったいのか、これは原曲の「くすぐったい」という表現を変えずに無理に「黒い雨」とくっつけたからであろう。「ホント、ウソだった」の箇所では、ホントとウソという反対語が並んで奇異に聞こえる。これも「ホント 好き

だった」の自然な原曲の歌詞から「ホント」だけを残して「ウソ」と無理にくっつけたからであろう。

しかしここで自然な歌詞の流れや芸術性を云々する以前に、「替えた」ということから生じる新たな価値にも目を向けるべきであろう。新たに生じた価値には大きく二点があると考えられる。第一の価値は、すでに民衆の耳馴れたメロディーを使用しているということにある。これにより、人々にはすぐに覚えてもらいやすく、たとえ CD として発売できなくても普及しやすいという価値が生じる。第二には、商業資本に緊密に結びついた CM ソングかつ恋愛歌を、その正反対の、商業資本と真正面から対立するような社会的なメッセージを込めた曲にした皮肉さにある。たとえば久々に同窓会で再会した片思いの彼女、その彼女と話し足りない気持ちは「もう止められない」という歌詞が、風に舞う放射能は「もう止められない」という歌詞に見事に置き替えられるとき、聴き手はしてやったりと皮肉さを感じる。この「皮肉さ」こそが「替えた」ことから得られた最も大きな新たな価値ではないだろうか。そしてその価値を認めるからこそ、民衆が共感を覚えて歌い、聴きついでいくのではないか。

おわりに

本研究では 2011 年日本の反原発ソングより、特に流行っている作品のなかから 1 曲を選び出し、それが民衆の共感を得る技法について 1960 年代ベトナムの反戦歌の分析枠組みを用いて比較を行った。結論として、民衆の叫びを代弁するという表現方法が多くの共感を得る技法として有益であるということが明らかになった。比較した両者が異なる国・文化（日本対ベトナム）、異なる時代（2011 年対 1960 年代）、異なるテーマ（反原発対反戦）であることから、この結論には一定の普遍性があると考えられる。

今後の課題としては、本研究で 1 曲だけを取り上げて分析した事例をさらに多くの作品や多くの国・文化、時代、テーマに広げて分析する必要があるだろう。それにより、本研究の結論がどこまで普遍性を持つのが検証できるであろう。

歌に関する研究論文を書くたびに陥るジレンマであるが、歌は何よりもまず歌い、聴くものであり、紙面に書かれた歌詞を読んだり、分析したりするものではない。かといって紙に印刷されて出版される論文に CD を付ける訳にもいかず、楽譜を載せたからといって音が聞こえてくる訳でもない。読者諸氏には、歌詞に込められたメッセージに賛同してもしなくても、ぜひいちど YouTube を開いて実際の音を聴いていただきたい。そうすることで、歌詞だけを引用した筆者がアーティストに対して感じる引け目を少しばかり低減できるような気がする。

参考文献

日本語文献

朝日新聞 (2011) 「『ずっとウソだったんだぜ』 反原発ソングに賛否」 5 月 24 日朝刊文化欄、朝日新聞名古屋本社、p.25

五十嵐正ほか (2011) 「プロテスト・ソング・クロニクルー 反原発から反差別まで」 ミュージック・マガジン 8 月増刊号、ミュージック・マガジン社、東京

新村出編 (1998) 「広辞苑」 岩波書店

中村とうよう (2007) 「プロテスト・ソング」 『世界大百科事典』 第 25 巻、平凡社、東京、p.291

吉井美知子 (2004) 「ベトナムの反戦歌ーチンコンソンの作品とその普遍性ー」 平和研究、Vol. 29, 日本平和学会、早稲田大学出版会、東京、pp.123-141

英語文献

Yoshii, Michiko. (2008) *Anti-War Songs of Vietnam : Trinh Cong Son's Creation and its Universality*, The Third International Conference on Vietnamese Studies, Abstracts, Hanoi, pp.355-356

Yoshii, Michiko. (2011) *Study on Anti-Nuclear Songs of Japan in 2011 – Compared with Anti-War Songs of Vietnam in 1960s -*, Asia-Pacific Peace Research Association, Conference Program, Kyoto, pp.15-16

日本語ホームページ

ウィキペディア (斉藤和義)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%89%E8%97%A4%E5%92%8C%E7%BE%A9> (2011/11/25)

ウィキペディア (ずっと好きだった)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%9A%E3%81%A3%E3%81%A8%E5%A5%BD%E3%81%8D%E3%81%A0%E3%81%A3%E3%81%9F> (2011/08/29)

小学館デジタル大辞泉

<http://kotobank.jp/word/%E3%83%97%E3%83%AD%E3%83%86%E3%82%B9%E3%83%88%E3%82%BD%E3%83%B3%E3%82%B0> (2011/12/26)

YouTube. 2011/04/07, ずっとウソだった

<http://www.youtube.com/watch?v=b01yohRgfy> (2011/08/30)

英語ホームページ

NY Times.com, Japan's New Wave of Protest Songs,

<http://www.nytimes.com/2011/07/01/arts/01iht-JAPANMUSIC01.html?pagewanted=all> (2011/11/24)

Asahi.com. 17/05/2011, Anti-nukes songs go viral after mainstream outlets reluctant to play them

<http://www.asahi.com/english/TKY201105160119.html> (2011/08/30)